

再展示される歴史と銅像—台湾社会と植民地期の日本人像

東京大学大学院
総合文化研究科博士課程
鈴木恵可

【要旨】

日本統治期の台湾（1895～1945）には、公園、広場、博物館といった公共空間にかつて多くの日本人高官の銅像が立っていた。銅像は日本統治期に入って初めて台湾に出現したモノであり、最も早期に人々の目に触れやすい場所に展示された西洋式彫刻作品であったと言える。しかし、銅像の大きな特徴は、それが近代彫刻という美術のカテゴリーに入りつつも、それを設置する行為・モノ・空間のそれぞれが強い社会的、政治的な意味を帯びている点にある。たとえば、植民地期初期における日本人総督像の設置は、台湾人名士による社会事業活動の一環としての意味もあり、台湾社会の新しい政治体制への反応でもあった。さらに、こうした銅像は都市の近代化と歩調を一にして出現し、一般の人々にとっても、日本統治という新しい社会の変化を視覚的に強く印象づけるものとなった。その後、1940年代以降の金属回収と日本の敗戦によって、こうした銅像は台湾社会から姿を消した。しかし、不思議なことに2000年代以降になって、わずかに残された植民地期の銅像が再発見され、展示され始めるという現象が起こっている。今回の発表では、植民地期の銅像設置の過程とともに、この複雑な歴史遺産を現代の台湾社会がどう取り扱っているのかについても言及したい。